

の導入など、日本の医療が近代化していき、その恩恵に浴した患者の声が伝わってきた。大正元年の手紙では「……私嬉しい！ 嬉しいんですもの!! あのね一昨日又他の薬を今度は腕に注射して頂きましたの、そしたらそれが良かったのですか、昨日から大変ぐわいがよくて熱もずっと下つてたつた七度三分しかなかったのですの……私これをかぎりにも全快出来る様な気がして……」と喜びと希望に満ちている。

一方、三名の医師に診てもらい、注射もしてもらったが、医薬の効果が無いという嘆きや、いつの世も変わらない医療費の悩みを訴える手紙がある。「食事でも通らぬ日々、医者・薬・養生食（牛乳・タマゴ）等にして金銭ノ入用少からず、母仕事も出来ず、日々介抱に付き添ひ居り度故、実に困難ハ言葉に尽せず、両親の心底御察し下されて、仮令少々なり共〇印御送付に預り度、金子御都合悪しくして御送附無候ば一度……」（明治三十九年）と親から子へ医療費の援助を頼んでいる。

本書は手紙を通して、医療にたずさわる側、医療を受ける側の生の声が伝わってきて非常に興味深い内容に満ちている。また写真も豊富で、見ているだけでも楽しい。

なお付記すると、本書には明治・大正・昭和の診察券が載っていて、その中に明治四十年の順天堂医院の紙製診察券がある。明治初期の順天堂の診察券は木版であり、蔵方家から出てきた。表には「順天堂」と焼き印がしてあり、裏は患者の住所・名前・年齢が墨で書かれている。「順天堂史・上巻」

の編纂の折に貸して、今でも順天堂大学に保管(?) されている。
(蔵方 宏昌)

〔朝日新聞社刊、二〇〇〇年二月二十一日発行、B五判、二二六頁、定価本体三三〇〇円〕

チャールズ・D・オマリー著 坂井建雄 訳

『ブリュッセルのアンドレアス・ヴェサリウス 一五四—一五六四』

本書は、カリフォルニア大学ロサンゼルス校医学部の医学教室のオマリー教授（一九〇七—一九七〇）が、近世解剖学の創始者であり近世医学の祖とされているアンドレアス・ヴェサリウス（一五一四—一五六四）の没後四百年を記念して、その全生涯をあらゆる角度から綿密にしかもダイナミックにとりあげ、奥行きと拡がりとも味わいのある伝記として出版された「Andreas Vesalius of Brussels 1514 By C.D. O'Malley」の全訳である。

訳者の坂井建雄教授は、優れた解剖学者であるのみならず、医学の歴史や古典にも造詣の深い碩学であり、得意の語学力を活かして原著に忠実に、しかもきわめてわかりやすいよくなれた日本語に翻訳された。その意を十分に理解したエルセビア・サイエンス・ミクス社がそれにふさわしい堅牢で重

厚な書として出版されたのがこの大著である。ヴェサリウスのスケールの大きいユニークな人生を反映した複雑な内容を、飽きさせることなく一気に読ませる迫力に、著者と訳者の見識、意気込み、一致した呼吸を感じ取ることができる。

ちなみに坂井教授は、本職の解剖学に加えて、多くの解剖学の歴史に関する著書や論文を出しておられる。ヴェサリウスに関するものいくつかを挙げてみよう。

解剖学書としてのヴェサリウスの「ファブリカとエピトメ」。日本医史学会誌 四三巻、四二二―四五七頁、(一九九七)。

ヴェサリウスと現代の解剖学。科学医学資料研究、二八四巻、一一一〇頁、(一九九八)。

謎の解剖学者ヴェサリウス(単行本)。一九九九年 筑摩書房。

これらの題目を一瞥するだけで坂井教授がわが国におけるヴェサリウス研究の第一人者であり、この大著の翻訳の最適任者であることが容易に領けよう。

まずオマリイの本書の内容の概略を知って頂くために、第二章からなる本文(六百三十七頁)の目次を列挙してみたい。

(一) ヴェサリウス以前の解剖学、(二) アンドレアス・ヴェサリウスの祖先、(三) プリュッセルとルーヴァンでのヴェサリウスの少年時代、一五二一―一五二三、(四) パリにおける医学の勉強、一五三三―一五三六、(五) ルーヴァンにおける医学の研究、一五三六―一五三七、(六) パドヴァ、一五三七―一五四二、(七) 「ファブリカ」と「エピトメ」の準備、

(八) 出版された「ファブリカ」と「エピトメ」、(九) 帝国宮廷勤務、一五四三―一五四六「支那根の書簡」、(一〇) 帝国宮廷勤務、一五四六―一五五五、(一一) 改訂された「ファブリカ」、(一二) 晩年、一五五九―一五六四。

これらの間に、六十四枚の興味深い歴史的な図版(話題の人物、古文書、当時の大学の風景、ファブリカを含む歴史的な解剖図など)が配置され、内容への理解とそれぞれの時代の想いを助ける。

本文の終わりには、原著者の七十四頁にわたる詳細な註と参考文献、訳者の二頁にわたる参考文献、十六頁におよぶ索引が付されている。

本書は、通り一辺の伝記ではない。自然科学の一分野である解剖学がどのようないきさつで、どのようにして生まれてきたか? 古代ギリシャ時代の解剖学はどのようなものだったか? 後世に大きい影響を与えた二世紀のガレノスの生理解剖学とは? ガレノスの思想が後世に及ぼした影響は? 十四世紀(一三一六)に自らの手で人体解剖を行い、「アナトミア」を著したポローニアのモンディーノ・デ・ルツチの解剖学が十五、六世紀の解剖学に及ぼした影響は? ヴェサリウスが出現する以前の十六世紀の解剖学者たとえば一五二一年に「小解剖学」を著したベレンガリオ・ダ・カルピの解剖学とは? プリュッセルに生まれ、ルーヴァンで育ち、パリの大学で学んだヴェサリウスが、師たちを鋭く批判しつつも結果的には、その正も反も自身の中で止揚させて血と肉にし

たスケールの大きい、したたかな能力とは？ パリの解剖学者たちの解剖学の実態とその影響は？ パリで学んだ古代の生理学者ガレノスの陰と陽の影響は？ 彼がパリを去り、ルーヴァンを経てパドヴァ大学に迎えられたいきさつは？ パドヴァでヴェサリウスが自分の手で解剖し、局所解剖的な思想と系統解剖的な考え方を駆使し、今までの解剖学者とは質量ともにまったく異なる多くの新知見を発見し、大著「フアブリカ」とその要約ともいわれる「エピトメ」を生んだいきさつは？ 革命的といわれるこれらの書の優れた具体的な内容は？ 人生における偶然と必要のからみ合いがその将来に与える影響の不可思議とは？ わずか五年でヴェサリウスがパドヴァを去ったいきさつは？ 「フアブリカ」が後世に与えた大きな影響は？ その後の彼の数奇な人生と運命は？ スペインの皇帝の侍医になったり、パドヴァに復帰しようとして果たせなかった真相は？ 解剖学への消え失せない情熱と一五五五年に「フアブリカ」の改訂版を出したいきさつとその意義は？ 天才の晩年は？ 等々。尽きせぬ興味深い多くの問題とそのなりゆきが、それぞれのページの本文とその行間に、綿密に調査した史実に基づき、鋭くかつ緩かい眼で生き生きと描かれており、いろんな角度からわれわれを刺激し、緊張させ、考えさせ、楽しませてくれる。そして人間とは？ 学問とは？ 独創性とは？ 学問の進歩とは？ 人間の生み出す文化とは？ などいろいろな問題を提起し、学ばせてくれる人生の書ともいえよう。

これを要するに、この詳細なヴェサリウスの伝記は、解剖学史、医学史に大きなインパクトを与え、人類の未来に輝く古典として残る辞書的な専門書であると同時に、人間というものについての生きた教養書であり、医学のみならず自然科学、人文科学、社会科学にたざさわる多くの人たちにも愛読してほしいと強く希望する。

(藤田 尚男)

〔エルゼビア・サイエンス・ミクス社、港区東麻布一丁目一五五東麻布1丁目ビル、電話〇三―三五八九―五二九〇、二〇〇一年四月、B五判、六三七頁、本体九五〇〇円〕

新村 拓 著

『在宅死の時代——近代日本のターミナルケア』

著者は日本の医療社会史とくに看取りの文化について造詣が深く、この分野の立派な著書を多数執筆しておられる。筆者は医師であり僧侶であるという関係から著者の出版物を数多く読んでいたが、この分野の多くの解明されていない部分を科学的に説き明かされる努力に対して心から敬服している。

今回筆者は『在宅死の時代』という意欲的な著書を出版された。これは明治・大正期の地主や医師の日記を通して、戦前における看取り文化を明らかにすると同時に、それが戦後